

# 南方（マレー）

我が人生に悔いなし

兵庫県 吉川 政雄

私は、大正四（一九一五）年二月二十七日、兵

庫県朝来郡朝来町八代で生まれました。徴兵検査は昭和十（一九三五）年で第二補充兵でした。

昭和十五年六月二十五日、兵庫県加古川町の高射砲第三連隊に応召、入隊しました。その当時の我が家の家族状態は次の通りでした。

父 健在 農業  
母 死亡  
長姉 健在 結婚して他家へ

次姉 健在 結婚して他家へ

本人 健在 鉱山会社勤務中

次男 健在 鉱山会社勤務中

三女 健在 会社員

三男 健在 養子で他家へ

四女 健在 小学生

妻 健在 家事（結婚昭和十四年四月十日）

長男 健在 一日

（昭和十五年二月二十一日生まれ）

なお、私の応召期間中は会社から応召手当を払ってくれ、留守宅には有り難いことで助かりました。

さて、高射砲第三連隊へ入隊しました。入隊前

に噂に聞いた内務班の厳しさはそのままに健在で、私共新兵は苦難の毎日でした。当時はノモンハンの戦場帰りの古兵が威張っていて、毎晚上靴のカカト部分を握ってのビンタです。また洗濯物を干している間によく盗まれることがあり「よし！ 取り返してこい」と叱られるので、洗濯干場で盗みかえしたところを隣の班の見張りに見付けられて大失態。あつちで怒られこつちで叱られもう散々でした。本当にもう無茶苦茶な世界に入ってしまったのだ。「とにかく辛抱辛抱。これを取り越えること。一人前の兵隊になるには並大抵ではない」と戦友同士いたわり合ったことを思い出します。

三カ月の教育召集はアツという間に終わり、召集解除で楽しい我が家に帰りました。

昭和は既に十六年に入り、戦争はますます拡大強化され、国民生活もだんだんと不自由になりました。

二度目の召集です。前回と同じく高射砲第三連隊へ昭和十六年七月十五日入隊。同日野戦機関砲第十九中隊へ編入されました。

七月二十二日下関出帆。七月二十三日釜山上陸。七月二十八日会寧着。この移動には百八十頭の馬を連れて行きました。これはもう大変、言葉以上のことでした。六日間は馬と同じ貨車内での寝起き生活。馬の水飼い、食事、馬体の手入れ、運動、排泄物の始末等々です。人間である自分自身の始末よりも馬優先の社会でした。

機関砲中隊は特別中隊で人員二百五十人、馬二十頭。昭和十六年七月二十八日、高射砲第五連隊に転属しました。十月二十日に一等兵となり、昭和十七年六月一日に上等兵となりました。この間、中隊長当番となり（中隊長殿は中村南海男）一層多忙となりました。

中隊長殿は営外居住で、住宅は兵営から九キロ程離れていました。それで毎朝乗馬を連れてお迎えに行く、この中隊長と乗馬の手入れと世話は一

切私の仕事でした。それに加えて私自身のこと及び私の受持ちの馬（輓馬）の世話という責任もとで行なわねばなりませんでした。人二人、馬二頭、超多忙、とうとうシラミをわかせてしまつた。

我が中隊の隣に重砲がいました。この隊の馬は我が中隊の馬より体格が高く、大きく力が強かつた。馬のいる部隊は馬の手入れがきびしく、検査、検査で追いまくられました。その間裸馬に乗って走り廻り、馬に馴れ、乗馬に習熟し、併せて馬の運動を兼ねて乗り廻しました。とにかく馬のいる部隊は信じて貰えぬ位忙しいものでした。

昭和十七年十一月二十六日、会寧発。同年十一月三十日、釜山出帆。昭和十七年十二月十五日、ラバウルに上陸しました。釜山より乗り込んだのは「バンドン丸」という五五〇〇トンの貨物船で、大分県の沖で二日停まって石炭を積み込みました。そして海軍の護衛つきの十八隻の船団を組んで行きましたが、しかしラバウルへ着いたのは

三隻のみでした。十五隻は敵の潜水艦にやられて海没しました。

私の乗った船は無事でした。魔のバシー海峡というところは文字通りの難所で、ここで沢山の輸送船がやられました。もちろん対空、対潜の監視員が双眼鏡をもって見張り、海軍の駆潜艇も警戒しているのだが、結果は無残と言うも愚かなりです。とにかくラバウルへ着きました。ここで三日間待機しました。船に高射砲を積み、約三千人の兵力を乗せてガダルカナルへ直行でした。

ラバウルとガダルカナル島の間にブーゲンビル島がありますが、その島の沖合で、昼の十二時頃か乗船がドーンと大きな衝撃を受けました。敵潜の魚雷命中である。中央の汽缶室辺りから白い蒸気が吹き上がって船は傾いてくる（船は夕方まで沈まなかった）。船内放送で「救命具をつけて食糧をできるだけ多く身につけて船外へ出よ」との指示がありました。

私は指示通りにして三八式銃一丁を持って海中

へ。その時海面に重油は浮いていなかったのです、天佑でしょうか。私は浮遊物につかまり、沢山の戦友と漂流開始です。運を天にまかせての心細い限りでした。漸く十八時頃、友軍の駆潜艇が廻って来て救助されました。その嬉しかったこと。

ブーゲンビル島へ上陸できました。三千人程乗っていたのですが三十人位死んだであろうか、正に九死に一生を得ました。時に昭和十七年十二月十八日でした。

ブーゲンビル島滞在中残念にもマラリアにやられ、加えて大腸炎にもやられ、昭和十八年三月一日に出帆、三月十二日宇品上陸で、同日付で広島陸軍病院に収容されましたが、さらに同日付で高射砲第五連隊補充隊に転属となりました。

昭和十八年四月九日、姫路陸軍病院転送となり、同年七月二十五日に治癒して退院となり、原隊に復帰しました。そして下関、釜山を経て会寧

着、高射砲第五連隊に転属しました。召集解除は昭和十八年九月二十日でした。

思えば戦線の拡大と流動に翻弄されて、南海の果てまで行動するという奔命に疲れる有様でした。とは言え、悲惨の代名詞のガダルカナルを目前にして、あの残酷な玉砕部隊の仲間入りから外れて武運に恵まれ、後方部隊に転属して召集解除とは、無念にも戦死、戦傷病に苦しむ戦友に対しては誠に相すまぬと感無量であります。

しかし戦局は悽愴苛烈の度を加え、銃後の内地といえども戦争の被害を出すように劣勢を示し始めました。この世相下に私を民間で遊ばせて置く程のゆとりは無いのは当然であつたでしょう。

昭和十九年九月十七日、また臨時召集で舞鶴重砲兵連隊へ応召となりました。特設第六十一機関砲隊に編入され、今度はどこへ？ 西か南か、と思いました。昭和十九年九月二十七日、門司を出帆、昭和十九年十月十二日、昭南に着きました。

やれやれ海路安全を祝し、戦友と抱き合っただものですね。

昭南（シンガポール）で強く印象に残っていること。第一に道路がコンクリート舗装されている。第二に無軌道電車が走っている、などです。昭和十九年十月十八日、昭南を出帆、十月二十日にスマトラ島パレンバンに上陸しました。そして昭和二十年八月一日に兵長となりました。進級を祝福することができ、ありがたいと思いました。

パレンバンでの最初の仕事は、兵舎の屋根の葺き替えでした。小舟に乗り三泊四日位で葺き替えの材料を集めました。このパレンバンでは毎日二〇隻位の三〇〇〇トン位の小さい船が油を積んで海軍へ配ります。その船の警備するのが任務の一つでした。輸送パイプと原油生産地の諸設備の警戒もありました。終戦前の戦況不振の期間には、敵の空襲を受けて、生産地が爆破炎上することも数回ありました。あたり一面真っ黒の煙りに

おおわれて、昼なお暗しと、文字通りの暗いこと、ひどいものでした。やがて終戦となり降伏。捕虜となりました。

昭和二十一年五月十七日出帆し、五月二十九日名古屋へ上陸、復員しました。

現在、孫四人、曾孫八人に恵まれ、お正月のお年玉等には二十万円要ります。喜びもまた辛いものです。

子や孫には私の人生訓の方針として、小さい頃から教育勅語を教えています。それと共に当時の国民の三大義務もきびしく教えて来ました。兵役、教育、納税の三つです。

最後に「我が人生に悔いなし」と天を仰いで高らかに唱えて、毎日を明るく楽しく暮らしております。